

おかやまのちから展

江戸時代の岡山

池田家文庫絵図名品展



T1-2 備前国絵図

会期：平成17年9月29日(木)～10月10日(月・祝) 10月3日(月)は休館

会場：岡山市デジタルミュージアム 企画展示室

岡山大学附属図書館

岡山市デジタルミュージアム

《 2005 》

おかやまのちから展

江戸時代の岡山

池田家文庫の絵図

岡山大学附属図書館が所蔵する池田家文庫は、江戸時代に備前国と備中国の一部を領地としていた岡山藩の藩政史料が中心となっている。その数は8万点を超え、全国でも有数の藩政史料として広く利用されている。さらに絵図・地図類も約3,000点を数え、江戸時代のものを中心に豊富な内容で知られる。『池田家文庫総目録』では、1 国図、2 郡図、3 城絵図、4 役所絵図、5 屋敷図、6 城下図、7 普請図、8 交通図、9 他所図、10 日本及び世界全図、11 寺社・学校・吉凶凶事関係絵図、12 戦略絵図、13 雑の13項目に分類されている。

江戸時代の絵図は大幅のものが多く、これまでも閲覧には多くの困難が伴った。また、肉眼では確かめることのできない細かな記載や描写も少なくない。岡山大学附属図書館では、そうした不便を解消するために早くから絵図類のデータベース化に取り組んできた。この事業には岡山県や岡山市からの協力もあって、江戸時代の主な絵図類についてはデジタルデータ化がほぼ終了した。今後、岡山市デジタルミュージアムでもさまざまなかたちで活用が計られると思われるが、デジタルデータとともに原図を直接観察することで、より豊かな認識が得られるものと期待される。

今回は、江戸時代の岡山のすがたを知ることができる代表的な絵図類を展示し、その一端をお知らせすることにした。

備前・備中の国絵図

古代の律令制以来、日本の地方行政の単位は「^{くに}国」と「^{こおり}郡」であった。江戸幕府も、この国と郡を単位に全国を掌握しており、国土にたいする統治権を誇示するために、国を単位とした絵図と土地台帳である郷帳を各地の大名に作成・提出させた。幕府による全国的な^{くにえず}国絵図・^{ごうちょう}郷帳の徴収は、^{けいちょう}慶長・^{しょうほう}正保・^{げんろく}元禄・^{てんぽう}天保の4度が知られている。

最初の事業は慶長9年(1604)に徳川家康によって命じられた。この時の国絵図と思われるものは、全国的にみても10か国あまりしか残されていない。また、慶長図では様式の統一なども指示されず、縮尺などもまちまちであった。池田家文庫にも慶長期の作と考えられる備前国図[19. 展示品番号、以下同じ]があるが、慶長国絵図そのものではないようだ。

ついで寛永10年(1633)に徳川家光が全国へ巡見使を派遣、かれらに諸国の国絵図を徴収させた。この国絵図を編纂し後に写したものが、「日本六十余州図」である。さらに幕府は、本格的な国絵図を作成するために、この絵図を改訂するよう中国筋の諸藩に命じた。この時に作成されたと考えられるのが池田家文庫の備前国九郡絵図[1]と備中国絵図[16]で、これらは他に例のない貴重なものである。

統一基準にもとづいた同じ様式の国絵図が全国一律に作られたのは、正保期が最初である。この時には、国絵図・^{しるえず}郷帳とともに^{みちすじならびになんどうふなじちょう}城絵図と道筋并灘道船路帳が作られている。岡山藩は、備前国と備中国の国絵図作成を担当しており、その^{ひかえず}控図が池田家文庫に残されている。正保図から国絵図は1里(約3.9km)6寸(約18cm)で描かれることとなった。縮尺は約1/21,600である。

次の元禄期には、^{くにざかい}国境の問題が重視された。開発が進むなかで各地で国境紛争が頻発するようになり、それに対処する必要が強まったからである。この時には、境を接する双方の国の役人や農民が立ち会って確認するとともに、「^{くにざかいへりえず}国境縁絵図」を作成・提出することが義務付けられた。なお、この時の備中国絵図の作成は、備中松山藩と足守藩に命じられている。

最後の天保期は郷帳の改訂が重視され、国絵図については変更点だけを幕府に報告し、最終的な絵図の清書も幕府の手で行われた。そのためか、池田家文庫にも控図などは残っていない。

池田家文庫 絵図名品展

岡山城と城下町

現在の岡山市の中心部は、江戸時代の岡山城下町を基にして発展した。この城下町は、戦国時代に宇喜多直家が居城を築いたことに始まり、その子の秀家が慶長2年(1597)に天守閣を完成、この頃その規模が整った。慶長5年(1600)の関ヶ原合戦後には小早川秀秋が岡山城に入り、外堀などの整備を行った。しかし、2年後に急死したため、姫路城主池田輝政の二男の忠継が岡山に封ぜられた。その後、忠継が死亡すると弟の忠雄が跡を継ぎ、この忠雄時代に外堀のさらに外側の開発が進み、城下町の西を画するように西川も整備された。

岡山城の本丸は、何重もの堀や石垣・櫓で囲まれた奥にある。ここには天守閣をはじめ、藩主の生活空間である御殿や公務を行う表書院など立派な建物が建ち並んでいた。天守閣は明治維新による廃城後も存続し、国宝にも指定されたが、昭和20年(1945)6月29日の岡山空襲によって焼失した。池田家文庫には城内の建物の図面も多く残されており、往時の偉容をうかがうことができる。

城下町の町割りを示す絵図も、江戸時代の初期から幕末まで10種類近くが残されている。それらから、細かな町の様子を知ることができる。

岡山後楽園

城下町には、藩主の憩いの空間である庭園が設けられる場合が多い。岡山では、池田忠雄の時代に旭川の付洲に御花畠が作られていたが、光政の時代には武家屋敷などに転用された。その子の綱政は、本丸の北東にあたる旭川の対岸に庭園を造営した。これが日本三名園の1つとして名高い後楽園で、当時は「御後園」とよばれていた。

造園が始められたのは貞享4年(1687)で、中心となったのは津田永忠であった。永忠は百間川や沖新田の開発など上道郡地域の総合開発を進めており、御後園の造営もその一環であった。当初は御茶屋とその周辺の庭ばかりのこぢんまりしたものであったが、次第に敷地が拡大され、元禄13年(1700)にほぼ現在の規模となった。

庭園内部の構成は、代々の藩主の好みによってたびたび

改変された。池田家文庫には多数の御後園絵図があり、その変化の様子を追うことができる。

新田開発と国境争論

岡山市域の半分ほどは、江戸時代以降の干拓によってできあがった土地である。いわゆる興除地域も江戸時代に作られた新田地だが、このあたりは備前国と備中国との国境にあたっていたため、開発にあたっては国境の確定が大きな問題になった。国境の干渉については、両国の百姓が漁業や農業に関わる用益権を主張した。それは生活に直結するだけに、双方とも譲ることができず、紛争は長期にわたった。結局、寛延3年(1750)と宝暦8年(1758)の2度の幕府裁許によって国境は確定する。この国境争論をはじめ、児島湾での新田開発に関わる絵図も池田家文庫には多い。

瀬戸内海の航路図

今も昔も、瀬戸内海は物資の輸送に欠かせない交通路である。江戸時代でも、特に寛文年間(1661～1673)に西廻り航路が確立し、東北・北陸地方の産物が直接海路で大坂に運ばれるようになると、瀬戸内海交通はますます盛んになった。岡山藩でも、藩主の江戸への参勤交代や藩米の輸送などのために海路を利用することが多かった。船手という藩の役所があり、藩主の御座船をはじめ多数の御船も抱えていた。池田家文庫の航路図には、浦々の名称や海上の里程を細かく記したものが多く、海上を移動する際にさまざまに利用されたと思われる。

大幅の国絵図や城下図・庭園図などは、残念ながら展示することができない。縮小複製でがまんしていたかざるをえず、大変申し訳ない限りである。岡山大学附属図書館では、これまで8回にわたって絵図を中心に貴重資料展を開催してきた。今回は岡山市デジタルミュージアムとの共催になったが、今後ともさまざまなかたちで貴重資料の展覧を続けていきたいと考えている。

展示品解説

1 びぜんのくにきゅうぐんえず 備前国九郡絵図

T1-14 [複製] 寛永 15 年 (1638) 頃
原本は 193.4 cm × 188.5 cm



「寛永古図」として伝えられるもので、備中国絵図 [16] とともに寛永 15 年 (1638) 頃に作られたものと考えられている。村形を郡別に色分けするだけでなく、郡の地の部分も色分けされているため、きわめてカラフルに見える。こうした様式は、慶長期の備前国図 [19] を受け継ぐものであるが、他にはあまり例を見ない。原図を 60/100 に縮小複製したものを展示している。

2 びぜんのくにきゅうぐんのちよう 備前国九郡之帳

B3-34-1 正保 2 年 (1645) 30.4 cm × 22.5 cm



3 びつちゅうのくにじゅういちぐんちよう 備中国十一郡帳

B3-34-2 正保 2 年 (1645) 30.4 cm × 22.5 cm



[2] と [3] は、幕府の命によって作成され、正保 2 年 (1645) に国絵図とともに提出された郷帳の控え。村名の難字に朱書きでかなを付け、翌年再提出した。村高とともに、水損・日損などの村況、村付きの山林や藪なども書き上げられている。2 組 4 冊が 1 つの桐箱に入れられており、箱の上書には「備前備中両国古高帳」とある。

4 びぜんのくにえずならびにごうちようしゅうのうばこ 備前国絵図并郷帳収納箱

T1-20 元禄 16 年 (1703) 65.0 cm × 57.5 cm × 11.5 cm



元禄の備前国絵図は、元禄 13 年 (1700) 12 月に一旦提出されたが、その後、讃岐国直島との国境争論の裁許を踏まえ、石島を書き載せて元禄 16 年 (1703) に再提出された。これはその控図を収納する桐製の箱で、上蓋の裏に再提出に至る経緯が記されている。控図は 2 枚あり、もう一つの方も立派な箱に収められている。

5 びぜんのくにえず 備前国絵図

(表紙 写真)

T1-2 明和2年(1765)11月 163.2 cm×199.8 cm

岡山藩主が池田宗政から治政に交替するに際して、幕府から国元に派遣された監使(目付、中坊左近・渡部久蔵)へ提出された国絵図の控図。元禄国絵図をもとに作られているが、1里4寸(約12cm)の縮尺で描かれており、原図をほぼ2/3に縮小したものである。松平内蔵頭は池田治政のこと。箱の上書によれば、一緒に備前国岡山城絵図・備中国之内領分絵図・学校御絵図が収められていたと考えられ、これら4枚が監使に提出されたと思われる。

6 びぜんのくにおかやまじょうえず 備前国岡山城絵図

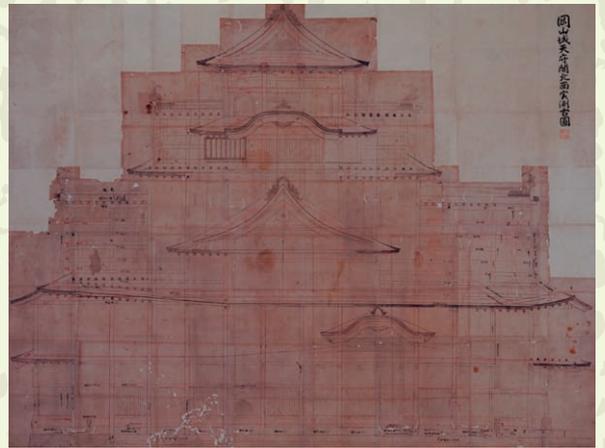
T3-84 正保年間(1644～48) 242.4 cm×196.7 cm



正保国絵図とともに幕府に提出された城絵図。丸の内櫓の配置や敷地の広さ、堀の広さや深さなどが克明に記されている。城下町内の武家地・町人地・寺地の区別、町方の町名なども書き込まれており、旭川の付洲の「御花鳥」には台徳院(徳川秀忠)御霊屋が見える。東山には瓶井山が描かれるが、東照宮は描かれていない。松平新太郎は、当時の岡山藩主の池田光政のこと。

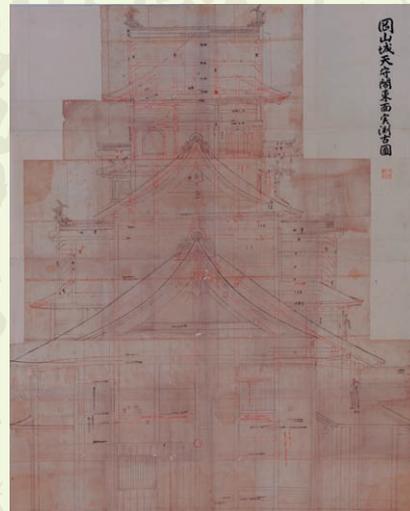
7 おかやまじょうてんしゅかくほくめんじっそくこず 岡山城天守閣北面実測古図

T3-67 年代未詳 230.4 cm×300.6 cm



8 おかやまじょうてんしゅかくとうめんじっそくこず 岡山城天守閣東面実測古図

T3-68 年代未詳 235.2 cm×190.0 cm



[7]と[8]は、岡山城天守閣を北面と東面とから描いた一対の指図。何の目的で作られたかは定かでないが、同じような様式の指図から、18世紀後半の棟梁鳥羽治郎右衛門の手になるものかと思われる。3重6層の構造を持ち、不等辺五角形の天守台に立てられているため、四方からの外観は均一でなく、変化に富んでいる。梁・桁・柱をはじめ唐破風なども細かく描かれている。柱の太さの書き込みからすれば、1尺がほぼ1寸で描かれており、縮尺は1/10ほどか。

展示品解説

9 牙城郭櫓実測図

T3-62 年代未詳 26.7 cm × 720.4 cm

岡山城本丸にある門・櫓・蔵および天守閣などの建造物について、その立面図と平面指図とを書き上げたもの。折本に仕立てられており、表紙題箋に「牙城郭櫓実測図 元小作事棟梁秘書」とある。城郭の構造を詳しく知ることができるため、軍事機密とされ、藩の小作事方棟梁の手元に秘書として伝えられたのであろう。



10 備中国絵図

T1-86 年代未詳 117.2 cm × 164.1 cm



徳川家光が寛永 10 年 (1633) に諸国へ派遣した巡見使が徴収した国絵図を、後に編纂したものが、「日本六十余州図」として伝えられている。池田家文庫には、尾張国と播磨国とを除く 66 か国分が残されており、そのうちの 2 枚を展示した。正規の国絵図と比べれば、描写は疎略で正確さにも欠ける。図中の城には貼紙があり、松山には「五万石 水谷左京」、津山には「拾八万六千五百石 森内記」とそれぞれ記されている。水谷勝宗が左京亮を名乗り松山藩主であったのは寛文 4 年 (1664) 12 月 18 日～元禄 2 年 (1689) 2 月 19 日、森長継が内記を名乗り津山藩主であったのは寛永 11 年 (1634) 12 月 28 日～延宝 2 年 (1674) 4 月 16 日である。

12 児島内海分間見取絵図

T8-71 宝暦 5 年 (1755) 正月 168.6 cm × 311.8 cm



11 美作国絵図

T1-94 年代未詳 116.7 cm × 164.1 cm



児島内海で備前と備中の国境をめぐる争われた争論に際して作られた絵図。両国の農民が立ち会って作られたもので、絵図の裏には双方の村役人名が書き上げられている。かぶせ絵図の形になっており、かぶせ紙には備前側の主張が示され、かぶせ紙を上げた地の図は備中側の主張にもとづいている。内海には、児島の漁師が魚を獲るために設置した多数の「やい」も書き込まれている。幕府評定所での審理は、この絵図にもとづいて進められた。百間 (約 180m) が七分 (約 2.1 cm) で描かれており、縮尺は約 1/8,600 である。

びげんのくにびつちゅうのくにのうちりょうないさんぶつえずちょう

13 備前国備中国之内領内産物絵図帳(2冊)

K1-1 K1-2 享保 21 年(1736)3 月 26.8 cm× 19.0 cm

金沢藩が幕府に献上した『庶物類纂』^{しよぶつるいさん}を増補するために、將軍吉宗は諸国に「産物帳」の作成を命じた。これに応じて岡山藩が作成したのがこの産物絵図帳で、228 種の動植物が極彩色で描かれている。同時に作成された備前国備中国之内領内産物帳には、1895 件の産物名が書き上げられている。作成に当たったのは、岡山藩学校の儒者たちであった。池田家文庫には産物絵図帳が 2 組残されている。1 つは控えて、6 冊を合綴して 1 冊としたもの。1 丁に 1 種を取り上げ、オモテに図像をウラに文字による解説を載せている。もう 1 つは写しで、2 冊本。1 丁のオモテとウラにそれぞれ 1 種ずつを取り上げ、解説は図像の余白に書き込まれている。また、写しの方には、巻頭に「産物帳」を編纂した経緯が記されている。展示は、写しの方である。



かいひんしゅうこう

14 海瀬舟行(上)

T8-76 文政 13 年(1830)4 月

27.4 cm× 1431.8 cm



[14]と[15]は、寛文 7 年(1667)に幕府による西国の沿岸調査に参加した衣斐玄水^{いびげんすい}が、その時の資料をもとに延宝 8 年(1680)に作成した航路図の写し。序言から、文政 13 年(1830)4 月に中島直勝が写したものであることが分かる。大坂以西の中国・四国・九州の海岸部をめぐる航路が描かれており、5 巻が 1 箱に収められている。海岸の地形が細かく描かれ、地名も村のなかの小集落まで記されている。航路・里程・小島などのほか、航海に必要な注意書きも見られる。(上)は大坂から平戸まで、(下)は淡路国岩屋から伊予国串浦までを描いている。卷子様式であるが、直角に曲がるように紙継ぎするなど工夫がこらされている。1 里(約 3.9 km)を 2 寸(約 6 cm)で描いているから、縮尺は 1/65,000 である。

かいひんしゅうこう

15 海瀬舟行(下)

T8-79 文政 13 年(1830)4 月 27.5 cm× 688.8 cm



びっちゅうのくにえず
16 備中国絵図

T1-30 [複製] 寛永 15 年 (1638) 頃
原本は 190.0 cm × 189.2 cm

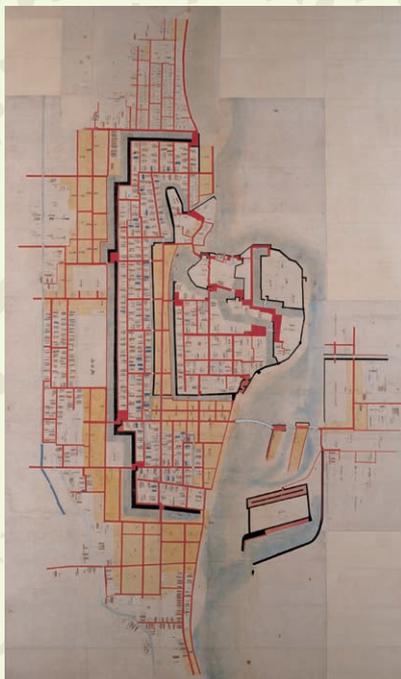
「寛永古図」として伝えられるもので、余白部分に領主名と知行高が書かれており、その領主名から寛永 15 年 (1638) 頃に作成されたと考えられている。様式は、備前国九郡絵図 [1] と同じ。村は郡別に色分けされた小判型で示され、村名・村高・領主名が記されている。原図を 60/100 に縮小複製したものである。



おかやまこず
17 岡山古図

T6-5 [複製] 寛永 9 年 (1632) 頃
原本は 515.4 cm × 309.0 cm

現存する最も古い岡山下図。池田忠雄時代に家臣の屋敷割りのために作られた絵図が、寛永 9 年 (1632) に池田光政が鳥取から岡山に転封になった際に引き渡された。光政は、この絵図に自らの家臣名を貼って屋敷割りに利用した。それがこの絵図である。外堀の西側にはすでに侍屋敷や寺院が建ち並んでいるが、川東はまだ開発が進んでいない。町人地は黄色で塗られ、区別されている。原図を 60/100 に縮小複製したものである。



ごこうえんえず
18 御後園絵図

T7-123 [複製] 文久 3 年 (1863)
原本は 189.0 cm × 194.0 cm

幕末期の後楽園の様子を示す絵図。元禄期の築庭以来たびたび手が加えられたが、この図では、中央の芝生、^{ゆいしんざん} 沢の池や唯心山、その南の^{せいでん} 井田や茶畑などが確認でき、現在の状況にかなり近づいていることが分かる。植生も色彩鮮やかに描き分けられている。園内には園の維持管理に当たる家臣や小者などが住み込んでいたから、そのための建物が多く建ち並んでいる。原図を 60/100 に縮小複製したものである。



びぜんのくにず
19 [参考パネル] 備前国図

T1-5 慶長年間 (1596 ~ 1615)
原本は 329.0 cm × 280.7 cm

現在知られる最も古い備前国の絵図。絵画的な古い画風で描かれており、慶長時代の絵図に間違いはないが、江戸幕府が作成を命じた慶長の国絵図との関係は不明である。



岡山下町は、天守閣や堀など総じて川西の景観は正確だが、川東は立派すぎて現実離れしている。^{しもつじょう} 下津井城・^{かながわじょう} 金川城・^{はつとうじ} 八塔寺などの絵画的表現も目を引く。

(岡山大学文学部 倉地克直)